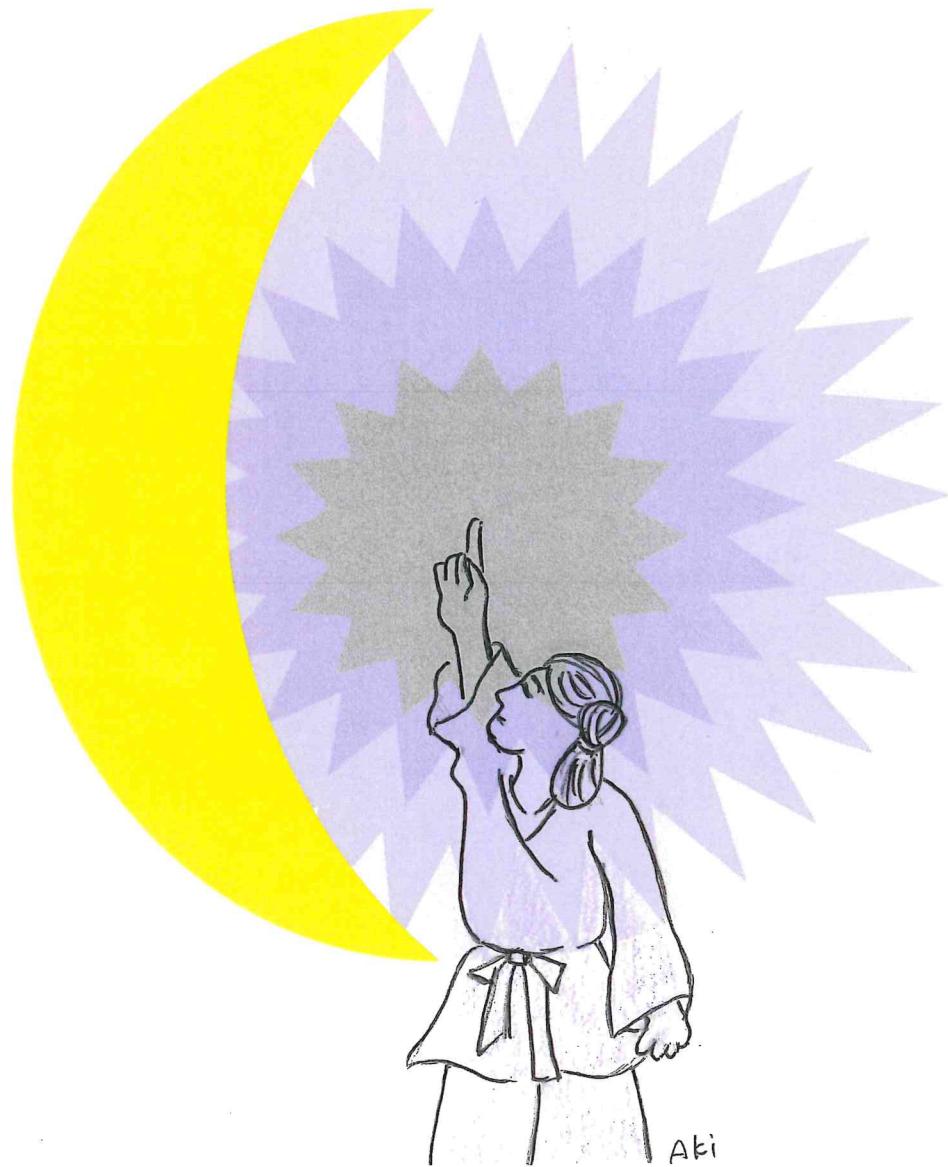


新編

月読命伝説



原案
制作

挿絵・レイアウト

伊藤ユキ子
姫りんご

出雲ブランド化推進市民委員会

ときは、神世のころまで一気にさかのぼります。

神々がお住まいになる天空の、「高天の原」から見おろせば、はるか下のほう。

いまだクラゲのように漂う下界をまとめ、固めるために降つていかれたのが、男の神さま・イザナキと、女の神さま・イザナミです。

この二柱の神は、契り、結び合つてはつぎつぎと国を生み、そして神々もお生みになりました。が、やがて、イザナミはヒノカグツチという火の神をお生みになつたのがもとで、病に臥せ、まもなく、お隠れになつてしまひます。

イザナキの嘆き、悲しみようは、狂わんばかり、日を追うごとに、逢いたさが募つていきます。

「ひと目だけでもいいから」と、死者が住まうとされる黄泉の国へとお出かけになつたのです。ところが、黄泉の国でイザナキが見たものとは…。身の毛もよだつようなイザナミの姿でした。その体には、ウジ虫が這いずりまわり、恐ろしい形相のイカヅチ神が八つもうごめいていたのですから。

ぞつとしたイザナキは踵を返し、逃げ出します。

「見ないでください」と懇願したはずなのに…。

「ひどい。よくもわたくしに恥をかかせて。

むごすぎるではございませんか」

イザナミの怒りはもうたぎるばかりで、

黄泉の国の、大勢の戦人などを動員し、終いには自らも、逃げるイザナキのあとを追いました。



が、危うくも、どうにかこうにか逃げおおせるイザナキ。

イザナキは、ほうほうのていで、葦原の中つ国、夫婦でつくりあげた地上の世界へと還り着きます。

黄泉の国に足を踏み入れたがために、身も心もひどく汚れ、けがれてしまつていてことにお気づきになつたイザナキ。

はやる心で向かわれたのが、筑紫の日向のあたりでした。わが身をきれいに洗つて、すすぐれ、禊ぎの仕上げに、

左目を洗われたとき成り出たのが、アマテラス。

右目を洗われたときツクヨミが、

続いて鼻を洗われたときタケハヤスサノヲが成り出たのだといいます。

イザナキは、「われは子を生み生みて、生みの果てに三柱の貴き子を得た」とたいそうお喜びになつたそうです。

まず、父神がツクヨミにお命じになつたのは、夜の国ではなく、アマテラスと並んで天を治める」とでした。

あるとき、姉神がツクヨミにおつしやいます。

「葦原の中つ国にウケモチノカミという食の神がおられるそだ。そなた、行つて見てきなさい」と。

すぐに地上へと降つていったツクヨミ。



ウケモチノカミは、天からの客人をこれでもかとばかり歓待します。

首を回して陸に向かうと、その口から米の飯が、海に向かうと、口から大小の魚、また、山に向かうと、口から毛皮をもつ動物たちが出てきたそうです。それらを、卓に山のぐとく並べてもてなされたのだとか。

ところが、ツクヨミは、憤つて詰め寄ります。

「なんとけがらわしい。なんじは、口から吐き出したものをこのわたくしに食べさせようというのか」そして、ウケモチノカミの説明も待たず、剣を抜き、殺しておしまいになつたのでした。

ツクヨミは、天に還り昇り、これを報告します。

「悪い神じやこと。そなたの顔など、もう二度と見たくもないわ」

以来、姉と弟は、昼と夜に分かれて住まわれることになつたのだといいます。

さて、アマテラスは、その後の様子をうかがおうと葦原の中つ国へ

アマノクマヒトを遣わします。

確かに、ウケモチノカミは亡くなつていきました。

が、その頭に牛馬が生まれ、額の上には粟、眉の上には蚕、眼の中には稗、腹の中には稻、陰には麦に大豆、小豆が生じているではありませんか。

アマノクマヒトが、それらを天にもち還り、奉ったところ、

アマテラスは、「みなが生きていいくのに必要な食べもの」だといたくお喜びになつたそうです。



ツクヨミは「月を読む」と書きます。

かつて、わたくしたちの先祖たちは、月の満ち欠けによつて、時間を、あるいは季節を感じしていました。

すなわち「月を読む」とは「ときを知る」ということ。

ツクヨミは、わたくしたちの暮らしに寄り添い、

ときには暮らしを支配する、絶対的な神だったはずです。

ならばなぜ、記紀は、その活躍なさるさまを伝えようとしなかつたのか。

いや、むしろ、偉大すぎたことが仇になつたのかもしれません。

天に輝き、麗しい光を放つ神が、もし、二柱いらっしゃつたならば……。

いざれもがぼやけてしまいましょう。

そう、天を統べるのは日の女神、一柱のみ。

十五夜だ、十三夜だと名月を愛でる心を持つわたくしたち。

立待月、居待月、寝待月などと呼び名を付け、

気もそぞろに月の出を、いまかいまかと待つたりもします。

その月を読み、夜の国を司るツクヨミです。

気高く、凜々しく、物静かで、青白い光を発しておいでではなかつたか、などと、つい想像してしまうのですが、いかがなものやら。

なにしろ出雲は、神々がすぐそばにいますところ……。



紀行 月読社

ツクヨミを祀る社が、この出雲にあることをご存じでしようか。

名もそのまま、「月を読む」と書いて、**月讀神社**……。

ひのみさき
日御崎神社の末社で、その南西、通称「**推惠さん**」

と呼ばれる小高い山の頂に鎮座ましましていきます。

登り口には、うつかり見逃してしまったような石の標識。

それが、月讀神社までは距離にして四〇〇㍍ほどと告げています。

木々やシダなどが鬱蒼と生い茂るなか、

枯れ葉や枯れ枝を踏みつつ一步、一步。

日の差す平らな空間に出ます。

目に入るのが、推惠神社という小さな社です。

手を合わせ、振り返ると、そこに、月讀神社の鳥居。

石の道標が、あと一八〇㍍と勇気づけてくれます。

が、ここからが急勾配なのです。

狭い山道を這う、樹木の根を足掛かりにして、一步、また一步と。

ほうほうの体で登りきつたところに、銅葺きの屋根をのせた月讀神社。

といつても、まことに小ぢんまりした祠です。

御祭神であるツクヨミの、記紀における存在のひそやかさに相応したような、

とでも申しましようか。

さて、壯麗な極彩色の**日御崎神社**。

ひしづみのみや
日沉宮にはアマテラスが、

石段の上、神の宮にはスサノヲが祀られています。
また、「そこ」のと仰ぐ山の頂にはツクヨミが。
しかし、住まう国を異にする三柱の神です。
天と地、昼と夜、もはやすれ違うばかりでいらっしゃるのでしょうか。
いえ、この出雲においては、年に二度ばかり、夏至の日と冬至の日に……。

夏至の日、出雲大社から見れば、

夕日がちょうど日御崎神社の真上に沈みゆきます、
あたりの山も海も朱色に染めて。

その線上に、月讀神社も鎮座しているのです。

薄香色の、まさに神々しい光の帯のなか、

並び立つ姉神アマテラスと、弟神ツクヨミとスサノヲ。

まずは、たがいの神威すこやかなことを確かめ合い、
積もるお話でもなさるのでしようか。

神世の一世とはいかほどのものなのか、

わたくしたちにはまるで計り知れない時間感覚なのですけれど、
お会いになる機会をお創りになつたのやら。

おやがみ
冬至の日にはまた、清々しい朝日の、光の帯のなかで。

ぜひ心の目を凝らしてごらんになつてみてください。

見えないものがふつと、立ち上がりつてくるかもしません。
そして、夫婦、親子、兄弟姉妹など、もうもろの縁について



日御崎神社



月讀神社



月讀神社の鳥居



月讀神社標識